

パスカルの《アポロジ》の プラン復元に関して (XXX)

竹 下 春 日

VI 序説(B)

前回迄の諸問題に対するすべての回答は、究極において、神の存在を前提とするものであった。したがってこの根本的前提そのものが、最大の問題と成らざるをえない。世人特に無神論者、懐疑論者に対する《アポロジ》としては、蓋しこれは当然のことでなければならぬ。それゆえ、神の存在に対する証明こそ、パスカルの意図した《アポロジ》の最高の任務であり、この証明法こそ、恐らくはデカルトの人性論的証明に対して自信を有したであろうパスカルによる、当時としては独創的なものである。そうしてこの独自の証明方法に対する、彼およびポール・ロワイヤルの人たちの学問的自信が、《A. P. R.》即ち《Apologie (à ou de) Port-Royal》なるタイトルを選ばしめたものと、われわれは推測しうるのである。

VII 聖書の記事内容の史実性の証明

(一) メシア信仰の永続性について。パスカルは、先づメシア信仰が古くから続いている事実を、指摘している——《永続性。／メシアはいつも信じられてきた。アダムの伝説は、ノアとモーセとにはなお新鮮であった。それ以後、預言者たちはメシアのことを預言し、それとともに他の事柄をも常に預言した。それらの出来事はときどき人々の目の前で起こり、彼らの使命が真実であることを示した。イエス・キリストは奇跡を行ない、使徒たちもそれを行なって、

すべての異教徒を回心させた。そのようにして、あらゆる預言は成就し、メシアは永久に証明されたのである。》(La. 541-Br. 616 (21°章))。

(二) ユダヤ民族の族長の長命の意義について。ところで、こうした信仰の永続性は、その担い手となるユダヤ民族の永続性を基盤とするものであって、この事に関しパスカルは、21°章の諸断章において触れ、大いに筆を費している¹⁾。次にこの民族の永続性がもたらすその伝承、伝説の史実性を強調するため、かかる永続性の原因と結果にかんして、パスカルは、次の如く述べている——この際原因とは族長の長寿であり、結果とは伝承の永続的保存であるが——《……族長たちの寿命が長かったことは、過去の事実の物語を失わせるかわり、かえってそれを保存するのに役立った。》(La. 569-Br. 626 (22°章))。

(三) モーセの証言について。パスカルは、ユダヤ伝承の史実性を保証した後、伝承の一部たるモーセの証言を掲げ、旧約聖書の記事内容の史実性を主張している——《モーセの証拠。／……とはいえ、彼〔モーセ〕はかつて人の思いに浮かんだもののなかで最も記憶すべき二つのこと、すなわち、天地創造と大洪水とを非常に近く、ほとんどすれすれに置いている。》²⁾、《セムはレメクを見、レメクはアダムを見たが、そのセムがまたヤコブを見、ヤコブがモーセを見た人々を見た。だから、大洪水と天地創造とは事実である。……》³⁾

(四) イエス・キリストを介してのみ、神を証明しうるということに就いて。《イエス・キリストによる神。／われわれはイエス・キリストによってのみ神を知る。この仲保者がなければ、神との交わりはすべて取り去られる。……しかしイエス・キリストを証明するものとして、われわれは預言を持っている。それは確實明白な証拠である。これらの預言は成就され、事実によってその真であることを立証したのであるから、これらの真理の確かさを、したがってイエス・キリストの神性の証拠を示している。ゆえに、彼において、また彼によって、われわれは神を知る。……》(La. 380-Br. 547 (23°章))。

この引用文により、《イエス・キリストの神性》が《預言》の《成就》によって証明されうることが分るが、パスカルの説く論理の道筋は、凡そ次の如くである。上掲の(一)～(三)により、聖書中の記事は内容的に確かなものであること

が、確定された。而して直前の《預言》なるものは、言う迄もなく聖書中のものであるから、イエス・キリストにかんする預言もすべて客観的事実であることは、これを疑いえない。それゆえ、イエス・キリストは神の子であること、及びその子をこの世に送った父たる神ヤーウェの存在もまた、聖書の章句中に出現しておる以上、預言の成就とともに証明されたことになる、言い得るのである（預言成就にかんする証明の事実上の作業は、次章（Ⅷ）以下において行われている）。

Ⅷ 聖書の象徴的性格について

(一) パスカルの聖書解釈法について。 神の存在の証明を遂行するためには、叙上の如く《預言》の《成就》が、証明されなければならない。預言の内容は、確かに史実を反映しているものであるが、パスカルによれば、預言の意味するところは、常識的表面的意味に尽きるものではない。彼によれば、預言者たちが《預言》のうちに秘めた深い意味が存するのである。これこそは、パスカルの所謂《表徴（象徴）》figure ないし《符号（暗号）》chiffre⁴⁾に外ならない、即ち聖書中に見られる特に重要な《預言》、《律法》、諸物件・事件、歴史等の記事は、そのうちに直接的表面的意味と深遠なる意味との《二重の意味》deux sens を含んでいるのである。換言すれば、パスカルの聖書解釈法は、謂わば広義における象徴主義的解釈の立場に立つものと、言いうるのである。次の二断章は、この事を示している——《表徴。／預言者たちは、帯、ひげ、焼けた髪の毛などの表徴によって預言した。》(La. 482-Br. 653 (24°章)), 《……ある著者の意味するところを理解するには、あらゆる相反する章句を一致させなければならない。／それゆえに、聖書を理解するにも、あらゆる章句がそこで一致するような一つの意味をとらえなければならない。いくつかの一致する章句を解くのに好都合な一つの意味をとらえるだけでは、不十分である。相反する章句さえも一致させる一つの意味をとらえることが必要である。……》⁵⁾。

(二) 象徴主義的解釈の妥当性を示す実例について。 次の断章は、『申命記』中に記されたモーセの戒言に基づいて、ホセアが行った預言の内容が、実現成

就されたことを、述べたものである——《主が選ばれた場所であるエルサレム以外の地で、供え物をささげることは許されず、十分の一の捧げ物を食することさえ禁じられていた。『申命記』十二章五節など、……／ホセアは預言して、彼らは王なく、君なく、供え物なく、偶像なきにいたるであろうと、言った。これはエルサレム以外の地で正式の供え物をすることができない今日、成就したわけである。》⁶⁾

この引用文中重要な点は、モーセの言葉を、一種の象徴——神の意図の象徴——と解釈したホセア自身の預言が実現したこと、即ちホセアの象徴的解釈の妥当性が、示された点に存する。そうして、こうした象徴的解釈の妥当性が、パスカルの聖書に対する象徴主義的解釈方法の根拠と成っているのである。

IX 神の存在の証明

(一) 《あらかじめ告げられたことを読み／成し遂げられたことを見よ／成し遂げられるべきことを思え》(La. 589-Br. 697) ——パスカルは、斯く書いておるので、原則としてわれわれは、預言全般の成就に至大の注目を要するが、特に重要な事項は、次のことに関してである。即ち旧約と新約とを一度に証明することに就いて。パスカルは、La. 508-Br. 642 (24°章) において、次の如く説いている——《旧約と新約とを一度に証明すること。／これら二つを一気に証明するには、一方〔旧約〕の預言が他方〔新約〕において成就しているかどうかを見さえすればよい。もし人がそれらに一つの意味しか認めなければ、メシアが来臨しないことは確かであるが、それらに二重の意味があるとすれば、メシアがイエス・キリストとして来臨することは、確かである。／だから、あらゆる問題は、預言に二重の意味があるかどうかを知ることにかかっている。……》。

上の引用断章において見られる様に、《旧約と新約とを一度に証明》するためには、二つの条件を満たすことが、必要である。即ち(a)《一方〔旧約〕の預言が他方〔新約〕において成就している》こと、及び(b)預言が《二重の意味》を持っていること、この両者(a・b)を証明する要が存するのである。この

うち(b)に関しては、Ⅷにおいて既に明らかになっている。それゆえ、残るところは、(a)にかんする事柄のみである。

(二) 新旧両聖約時代の出来事にかんする、旧約聖書中の預言の成就したものの内容(実例)に就いて。(1)《かれ〔メシア〕は、ベツレヘムから生まれるであろう、ミカ書5章。》(La. 647-Br. 727)。(2)《かれはおもにエルサレムに現われ、ユダとダビデの氏族から生まれる。》(イザヤ書22章——La. 647)。(3)《預言——次のことは預言されていた。救い主の時が来れば、かれは、エジプトからの脱出をも忘れさせるような、あたらしい契約をたてるために来られるであろう、エレミヤ書23章5節、イザヤ書43章16節。》(La. 637-Br. 729)。(4)《かれは、知者や学者の目を見えなくするであろう、イザヤ書6, 8, 29章など。》(La. 647)。(5)《貧しい者と小さい者に福音を伝えるであろう、イザヤ書29章。》(La. 647)。(6)《盲人の目をひらき、病人に健康をとりもどさせ、暗黒の中で苦しみ悩んでいる人々を光にみちびくであろう、イザヤ書61章。》(La. 647)。(7)《——栄光ある第二の神殿。イエス・キリストはそこへ来られるであろう、ハガイ書2章7, 8, 9, 10節。》(La. 652-Br. 715)。(8)《……その時、偶像礼拝はくつがえされるであろう。この救い主が、すべての偶像をうち倒し、人々を、まことの神礼拝へとみちびき入れるであろう。》(エゼキエル書30章13節——La. 615-Br. 730)。(9)《彼は人間に完全な道を教えられるであろう。》(イザヤ書2章3節)。(10)《「あなたがたのむすこは預言をするであろう」》(ヨエル書2章28節——La. 619-Br. 732)。(11)《預言は不信仰の者には、理解されないであろう、ダニエル書12章、ホセア書最終章10節。》(La. 647)。(12)《「……人はその時もはや、その隣人に教えて、『ここに主がいます』とは言わない。それは、神がすべての人にご自身を知らしめたもようにされるからである」》(エレミヤ書31章34節——La. 619-Br. 732——「 」内は、パスカルによる聖書からの引用章句)。(13)《かれら〔ユダヤ人たち〕を、見ていながら見ず、聞いていながら聞いていないというふうに……》(イザヤ書6章9, 10節——La. 628-Br. 753)。(14)《預言によれば、かれは、貧しい者としてあらわされているが、また、もろもろの国民の主とし

てもあらわされている、イザヤ書50章14節、53章など、ゼカリヤ書9章9節。》
 (La. 647-Br. 727)。 (15)《こうして、かれは捨てられ、否認され、裏切られ、詩篇第108篇・8節、売られ、ゼカリヤ書11章12節、唾をかけられ、むち打たれ、あざけられ、ありとあらゆる手段で苦しめられ、苦汁を飲まされ、詩篇第68篇、突きさされ、ゼカリヤ書12章、手足をさし通され、殺され、その着物はくじ引きにされるであろう、詩篇第22篇。》 (La. 647)。 (16)《「かれは、おのれを撃つ者にはほおを向けるであろう」》 (エレミヤ哀歌3章30節——La. 614-Br. 773)。 (17)《彼はよみがえる、詩篇第16篇、三日目に、ホセア書6章3節。》 (La. 647)。 (18)《王たちは、武装してかれにさからうであろう、詩篇第2篇。》 (La. 647)。 (19)《偶像をおがむ異教的な四つの王国、ユダの支配の没落、七十週が同時に起こらねばならなかった*。しかも、そのすべてが、第二の神殿の破壊される前に起こらねばならなかったのだ。》 (*ダニエル書9章24~27節——La. 627-Br. 709)。 (20)《彼は父なる神の右にあって、その敵にうち勝つ。/地の王たちと万民とは彼を拜する、イザヤ書60章。》 (La. 647)。 (21)《ユダヤ人は民族として存在しつづけるであろう、エレミヤ書。》 (La. 647)。 (22)《かれらはさまようであろう、王もなく……、ホセア書3章、預言者もなく、アモス書、救いを待ち望みながら、それを見出すことができずに、イザヤ書。》 (La. 647)。 (23)《「わたしは、わたしの霊とわたしをおそれる恐れとを、あなたがたの心に置くであろう」》 (エレミヤ書32章40節——La. 619-Br. 732)。 (24)《イエス・キリストによって異邦人の召されること、イザヤ書52章15節、55章5節、60章など、詩篇第72篇。》 (La. 647)。 (25)《ホセア書1章9節、「あなたがたは散らされて、ふえひろがった後に、もはやわたしの民ではなく、わたしは、あなたがたの神ではないであろう。わたしの民ではないと言われたその所で、わたしは、わたしの民と言うであろう」。》 (La. 647)。 (26)《イザヤ書66章18節、「……かれらはわが栄光を見る。わたしはかれらの中に一つのしるしを立てて救われた者を、アフリカ、リデイヤ、イタリヤ、ギリシヤのもろもろの国、またわたしについて聞いたことがなく、わが栄光を見たことのない民のもとにつかわす。かれらはあなたがたの兄

弟を連れてくるであろう」。》(La. 664-Br. 713)。 (27)《ユダヤ人の無期捕囚——エレミヤ書11章11節, 「わたしは, ユダの上にわざわいをきたらせる。かれらは, それをまぬがれることはできない」。》(La. 664)。 (28)《……また, あくまでもかれを知らないと言いつづけることによって, かれら自身が非のうちどころのない証人になった。そしてかれを殺し, かれを否認しつづけて, 預言を成就させた(イザヤ書60章, 詩篇70篇)。》(La. 663-Br. 761)。 (29)旧約時代のユダヤ人, および古代史中の歴史的イベントにかんする, キリスト出現以前において成就した預言の内容(A)について(以下, 預言の内容(B), (C), (D)……と記す)——《「……[イスラエルのうちの残った者を帰らせること]は, いとも軽いことである」。》(イザヤ書49章6節——La. 636-Br. 727bis)。 (30)預言の内容(B)について——《エゼキエル書37章25節, 「わがしもベダビデが, 永遠にかれらの君となる」。》(La. 644-Br. 713 bis)。 (31)預言の内容(C)について——《出エジプト記4章22節, 「イスラエルは, わたしの長子である」。》(La. 644)。 (32)預言の内容(D)について——キロス以後に, ペルシヤに《三人の王》が起こることに関する預言(ダニエル書11章2節——La. 662-Br. 722)。 (33)預言の内容(E)について——《次に来る第四の者》(クセルクセス)が, ギリシヤの国を攻めることに関する預言(ダニエル書11章2節——La. 662)。 (34)預言の内容(F)について——《……またひとりの力ある王[アレキサンドロス]が起こり, その国ははてしなく領土をひろげ, 王はその意のままにすべての事業をなしとげるでしょう。》(同書同章3節——La. 662)。 (35)預言の内容(G)について——《しかし, その王国が一たん建設されるとき, ほろぼされ, 天の四方に向って四つに分けられるでしょう, けれども, それはかの子孫には帰せず, かれの後継者はかれほどの権力もなく, かれの国は分散して, これら[四人の後継者]以外の者どもに帰するでしょう。》(同書同章4節——La. 662)。 (36)預言の内容(H)について——《さて, かれの後継者の中で南の方を支配する者[エジプトのプトレマオス]は強くなります。しかし, 別の一人がこれにまさり, その国は大いなる国となります[シリア王セレウコス]。》(同書同章5節——La. 662)。 (37)預言の内容(I)について——《年経てのち, かれらは縁組を

なし、南の王の娘〔ペレニケ〕が、北の王〔アンテイオコス〕に来て、この二君主の間に和親をはかります。》(同書同章6節——La. 662)。 (38)預言の内容(J)について——《しかしその女〔ペレニケ〕も、その子孫も、ながく權威を保つことができません。その女と、女を送ってきた者と、その子およびその友は、死にわたされるでしょう。》(同書同章6節——La. 662)。 (39)預言の内容(K)について——《ところで、この女の根から、一つの芽が起こり〔プトレマイオス・エウエルゲテスは、ペレニケと父を同じくしている〕、強力な軍隊をもって、北の王の地に攻めてきて、すべてをその支配下におくでしょう。》(同書同章7節——La. 662)。 (40)預言の内容(L)について——《しかし、北の王の子ら〔セレウコス・ケラウノス、アンテイオコス大王〕は、憤激して、あまたの大軍を集めるでしょう。そして、かれらの軍隊は、攻め寄せて、すべてを荒らしまわるでしょう。そこで南の王〔プトレマイオス・フィロパトル〕は、大いに怒り、大軍を組織して、戦をいどみ、これに勝つでしょう。かれの軍隊はそのために心おごり、かれの心は高ぶるでしょう。かれは数万人を倒しますが、その勝利はたしかではありません。それは、北の王〔アンテイオコス大王〕がまた初めよりも大いなる軍を起こして、帰ってくるからです。》(同書同章10～13節——La. 662)。 (41)預言の内容(M)について——《そのころ、多くの者が起こって、南の王〔プトレマイオス・エピファネス〕に敵します。またあなたの民のうちの背教者、あらくれ者が、みずから高ぶって、まぼろしを成就しようとするが、ほろびるでしょう。こうして北の王が城壁をこわし、堅固な町を取るが、南の王の全力をもって、これに立ち向かうことができず、すべて、その意にしたがうことになるでしょう。》(同書同章14～15節——La. 662)。 (42)預言の内容(N)について——《かれはイスラエルの地にとどまり、その地はかれにしたがいます。こうして、かれは全エジプト王国の主となろうと考えます。かれはエジプトと同盟を結び、その娘〔クレオパトラ〕をエジプト王に与えます。かれは、娘が墮落する〔夫を欺く〕のをねがうが、娘は父の意向に従いません。そこでかれは別な陰謀にふけり、いくつかの島々の主となることをもくろみ、その多くを取ります。》(同書同章17～18節——La. 662)。

(43) 預言の内容(O)について——《しかし、ひとりの大將〔ローマの將スキピオ・アフリカヌス〕があって、王の攻略に抵抗し、かれ〔アンテオコス王〕が与えた恥辱をそそぎ、その恥辱をかれの上に返します。こうしてかれは、自分の国に帰りますが、そこでほろぼされ、消え失せるでしょう。》(同書同章18～19節——La. 662)。

(44) 預言の内容(P)について——《さて、かれにかわって起こる者〔セレウコス・フィロパトル〕は、専制君主であって、租税を重くし、国の栄光〔人民〕を苦しめるでしょう。しかし、かれは反乱にも戦争にもよらず、しばらくの間に殺されてしまいます。》(同書同章20節——La. 662)。

(45) 預言の内容(Q)について——《かれにかわって起こる者〔アンテオコス・エピファネス〕は、卑しむべき者であって、王の榮譽を受ける値打ちがなく、かれは巧みに甘言をもってそこに入りこむでしょう。全軍隊はかれの前に屈し、かれに敗られ、契約の君たる者もまた敗られるでしょう。かれは、これとあらたに同盟を結んで後、これを裏切り、わずかな軍をもって、その平和な州にやすやすと攻め入り、そのもっとも豊かな所を取り、その父祖たちのしなかったことを行ない、あちこちで略奪をほしいままにして、その在世中、非常なはかりごとをめぐらすことでしょう。》(同書同章21～24節——La. 662)。

以上(二)における出典個処の数(45)は、われわれ自身の調査した最少限のものに過ぎない。しかし旧約聖書のイエス・キリスト関係にかんする預言の内容が、少なくとも28の個処で、新約聖書の記事内容と符合一致しておるという事実は、言う迄もなく成就した預言が、28個(上出の(1)～(28))もあるということである。しかもこれら成就した預言全体が、内容的に一貫した組織的整合性をもって相互に関連しつつ、一大叙事詩的構成を具備しているのである。而してこれ以外に、旧約聖書の記述内容におけるユダヤ人、および古代史中の著名なる歴史的諸事件にかんする、成就した預言の数は、少なくとも17個(上出(29)～(45))に達するのである。キリスト者数学者としてのパスカルの立場から観るとき、以上すべての事実は、全体として、決して偶然ではなく、創造者たる神の摂理の必然性を示すものでなければならない。かくして、イエス・キリスト出現以前の時代における預言成就の指摘と、《旧約と新約とを一度に証明すること。》

(La. 508——Ⅸ回の(→)に既出) とは、——パスカルにとって——父なる神の存在とイエス・キリスト来臨とを、数理的統計的に確定証明したことに成るのである。

(f) パスカルによる神の存在にかんする証明方法の要約。——(1)パスカルは先づユダヤ氏族の族長たちの長命にもとづく、同民族の生物的人種的永続性を指摘する。(2) 次にこれを原因とする、信仰・律法・伝承(これらを文書化した聖書)等の恒久的保存を根拠として、これらの史実性が確定される。(3) しかし聖書の記述内容は、正確なものとしても通俗的常識を以ってしては、これを解しえない。なぜなら、聖書の章句中には、《相反する》表現が存するからであり、その語句はしばしば《二重の意味》を有しているからである。こうしてパスカルの象徴主義的解釈方法が、提起される。

(4) そうしてこの解釈法により、聖書の真意が開示されるのであるが、この際同時に統計的方法が援用され、旧約・新約の本質的内容における整合的一貫性が、証明されるのである。より詳細に言えば、統計・組み合わせに係わるこの数学的手法¹⁰⁾が、象徴主義的解釈法と相俟って、「旧約中の預言の新約における実現成就」が、イエス・キリスト関係にかんする少くとも章句の28個処において、証示されたのである。換言すれば、イエス・キリストを介して、彼自身の神性および父たる神ヤーウェの存在が、論理的に証明されたのである。以上が、パスカルの意図した神の存在の証明方法の略図である。

X 隠れた神

パスカルの《アポロジ》の《結論》(29°章)中の最大のテーマは、《隠れた神》である。これについては、本章以前の諸章において既に触れられているが、パスカルは《結論》において、特にこれを強調し、かつ総括的に述べる意図であったと、見られる。

(→) 隠れた神の存在に対する疑問と、これに対する回答について。神の存在は、上掲のごとく論理的に証明されたが、パスカルは神を《隠れた神》 Dieu caché と呼ぶ。世人の常識から言えば、神の存在は証明されたのであるから、

神は恒にわれわれ人間の眼の前にその姿を現わしていて然るべきである。しかし実際には、われわれは神を視ることは出来ない。それゆえ、パスカルが神を《隠れた神》と称することは、一応世人にとって理解しうるところである。しかし、懷疑論者たち並びに無神論者たちにとっては、《隠れた神》とは、実は存在しない神と同然ではあるまいか、という疑念が生ずることは、容易である。だがパスカルの次の言葉は、この疑問を払拭するものである——《永遠の存在者は、一度存在すれば、常に存在する。》(La. 453-Br. 559 bis (29°)), 《もし神を現わすものが全くなかったとするならば、この永久の欠如は両義的なものとなり、人間が神を知るに値しないことを示すとともに、およそ神的なものの存在しないことを示したかもしれない。だが、神が常にではないにしても、時おり現われたということは、両義性を取り去ってしまう。もし神が一度でも現われたとしたら、神は常に存在する。そこで神は存在するけれども、人は神を知るに値しないと結論するほかはない。》(La. 453-Br. 559 (29°章))。

〈補遺〉 (1)今回の脚注は、すべて次回の末尾に記載する。(2)文中「象徴主義的解釈」なる語が用いられているが、パスカルの聖書解釈は、広義における象徴的解釈に属するものである。而して象徴的解釈は、学的自覚なしに行われることが可能であるが、パスカルの場合は、深い方法論的自覚をもって遂行されているので、かかる名称を用いたのである。(3)Ⅸの(二)中の訳文は、田辺保訳による。(本章未完——XXX 回了)